

## 平成 25 年度 第 4 回文系チャレンジ講座を実施しました (H25/10/16)

平成 25 年度第 4 回文系チャレンジ講座が、2013 年 10 月 16 日、「資本の循環・回転について」をテーマとして、本学経済学部の片山准一教授によって行われました。遠隔配信された大分雄城台(おぎのだい)・大分鶴崎・大分商業・安心院(あじむ)・日田・高田・別府青山・大分西・三重総合・臼杵の 10 校(265 名)と、来学した由布高校(14 名)を合わせて、計 279 名の高校生が受講しました。

はじめに片山先生は「経済学や経営学の基本中の基本である“資本の循環と回転について”、高校生のみなさんにわかるようにわかりやすい言葉で説明していきましょう。この授業がみなさんの毎日の生活の中で生かされることを期待しています。」と、問いかけ、授業を開始しました。

片山先生は、経済学にはじめて接する高校生のために、基礎となる「資本」について、説明をしました。

はじめに、「資本」とは「価値増殖する運動体」とであると定義した上で、実際の企業活動ではどうなのか説明していききました。次に資本の循環を「購買過程」「生産過程」「販売過程」の 3 つに分類し、企業の行動原則について触れ、企業は利潤をあげるために活動しており、利潤のもととなる「剰余価値」が必要であると教えてくださいました。

次に、剰余価値を生み出す「生産過程」についての説明へと進み、商品は「生産手段」(原料などの「労働対象」と、道具・機械・工場建物などの「労働手段」の 2 つの要素からなる)と「労働力」を組み合わせ、生産が行われていることの説明がありました。この「労働対象」は、いったん生産過程に入ると別のものになっていく「流動資本」であることに対して「労働手段」は、何度も生産過程において使用される「固定資本」であることや、「労働対象」や「労働手段」は価値が移転するだけでかわらない「不変資本」であるが、「労働力」は価値を創造する「可変資本」であると時間をかけて説明しました。

さらに「生産過程」において、「剰余価値」を大きくするための企業の行動について説明があり、企業は、労働力の生産性を高めるために今日の大量生産方式を生み出しており、この大量生産方式を確立するまでの機械化や装置化が、「生産過程」に取り入れられる過程を教えてくださいました。

最後に、片山先生は受講生に、「大学に入っても真摯な気持ちで勉強に取り組んで欲しい。常に疑問や興味を持って大学の講義に取り組んで欲しい。」とエールを送りました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(94%、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(99%)、「授業内容はわかりやすかった」(80%)、「板書(スライド)は適切だった」(84%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(93%)と高い評価結果ができました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(91%)、「映像はよく見えた」(93%)という結果ができました。

受講生の具体的な声として、「電子ホワイトボードに手書きしながら、丁寧な説明でよく理解できた。」「先生の話が面白く、一番興味深く学習ができた。」「他校生の様子が見え、負けないようにしっかりしなければと思った。」「資本のメカニズムがわかった。」「大分大学に入学できたら、片山先生の授業を受けたい。」など、多くの感想が寄せられました。

